

第 69 回 SGRA フォーラム
第 7 回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性
『歴史大衆化』と東アジアの歴史学』

日 時： 2022 年 8 月 6 日（土）午後 2 時～5 時（予定、日本時間）

方 法： オンライン（Zoom Webinar 方式）

主 催： 第 7 回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性実行委員会

共 催： 渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）

助 成：（公財）鹿島学術振興財団

■開催経緯

「国史たちの対話」企画は、自国の歴史を専門とする各国の研究者たちの対話・交流を目的として 2016 年に始まり、これまでに 6 回開催した。国境を越えて多くの参加者が集い、各国の国史の現状と課題や個別の実証研究を巡って議論と交流を深めてきた。第 5 回（2021 年 1 月 9 日）及び第 6 回（2021 年 9 月 11 日）は新型コロナ流行下でも対話を継続すべくオンライン開催を試み、議論を深めることができた。

今回は新たに「歴史大衆化」を取り上げ、問題提起と 3 カ国からの指定討論を皮切りに討論を豊かに展開し、これまで広がってきた参加者の輪の連帯をより一層深めたい。

今回も円滑な対話を進めるため、日本語⇄中国語、日本語⇄韓国語、中国語⇄韓国語の同時通訳をつける。フォーラム終了後は講演録（SGRA レポート）を作成し、参加者によるエッセイ等をメールマガジン等で広く社会に発信する。

■開催趣旨

新型コロナ感染症蔓延が続くなか、「国史たちの対話」ではオンラインでのシンポジウムを開催し、一定の成功を収めてきたと考える。イベントを開催する環境にはなお大きな改善が期待しづらいことを踏まえ、引き続き従来参加してきた人々のなかでの対話を深めることを重視した企画を立てた。

大きな狙いは、各国の歴史学の現状をめぐって国史研究者たちが抱えている悩みを語り合い、各国の現状についての理解を共有し、今後の対話に活かしてゆきたい、ということである。こうした悩みは多岐にわたる。今回はその中から、各国の社会情勢の変貌、さまざまなメディア、特にインターネットの急速な発達のもとで、新たな需要に応じて歴史に関係する語りが多様な形で増殖しているが、国史の専門家たちの声が歴史に関心を持つ多くの人々に届いておらず、かつ既存の歴史学がそれに対応し切れていない、という危機意識を、具体的な論題として設定したい。

共通の背景はありつつも、各国における社会の変貌のあり方により、具体的な事情は多種多様であると考えられるので、ひとまずこうした現状認識を「歴史大衆化」という言葉でくくってみた上で、各国の現状を報告していただき、それぞれの研究者が抱えている悩みや打開策を率直に語り合う場としたい。

■プログラム

第1セッション (14:00-15:20) 総合司会：李 恩民 (桜美林大学)				
	開会の趣旨	10分	彭 浩	大阪公立大学
	問題提起	30分	韓 成敏	世宗大学
中国	指定討論	10分	鄭 潔西	温州大学
日本	指定討論	10分	村 和明	東京大学
韓国	指定討論	10分	沈 哲基	延世大学
	コメント	10分	韓 成敏	世宗大学
—休憩 10分—				
第2セッション (15:30-16:45) モデレーター：南 基正 (ソウル大学)				
	論点整理	10分	劉 傑	早稲田大学
	自由討論	65分	パネリスト (問題提起者、討論者、国史対話プロジェクト参加者)	
第3セッション (16:45-17:00) 総合司会：李 恩民 (桜美林大学)				
	総括	10分	三谷 博	東京大学名誉教授
	閉会挨拶	5分	趙 珖	高麗大学名誉教授
	同時通訳	日本語⇄中国語：丁 莉 (北京大学)、宋 剛 (北京外国語大学) 日本語⇄韓国語：李 へリ (韓国外国語大学)、安ヨンヒ (韓国外国語大学) 中国語⇄韓国語：金 丹実 (フリーランス)、朴 賢 (京都大学)		

■「国史たちの対話」プロジェクト

渥美国際交流財団は2015年7月に第49回SGRA(関口グローバル研究会)フォーラムを開催し、「東アジアの公共財」及び「東アジア市民社会」の可能性について議論した。そのなかで、まず東アジアに「知の共有空間」あるいは「知のプラットフォーム」を構築し、そこから和解につながる智慧を東アジアに供給することの意義を確認した。

このプラットフォームに「国史たちの対話」のコーナーを設置したのは2016年9月の第3回アジア未来会議の機会に開催された第1回「国史たちの対話」であった。いままで3カ国の研究者の間ではさまざまな対話が行われてきたが、各国の歴史認識を左右する「国史研究者」同士の対話はまだ深められていない、という意識から、まず東アジアにおける歴史対話を可能にする条件を探った。具体的には、三谷博先生(東京大学名誉教授)、葛兆光先生(復旦大学教授)、趙珖先生(高麗大学名誉教授)の講演により、3カ国のそれぞれの「国史」の中でアジアの出来事がどのように扱われているかを検討した。

第2回対話は、自国史と国際関係をより構造的に理解するために、「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」というテーマを設定した。2017年8月、北九州に日本・中国・韓国・モンゴルから11名の国史研究者が集まり、各国の国史の視点からの研究発表の後、東アジアの歴史という視点から、朝貢冊封の問題、モンゴル史と中国史の問題、資料の扱い方等について活発な議論が行われた。この会議の諸発表は、東アジア全体の動きに注目すると国際関係だけでなく、個別の国と社会をより深く理解する手掛りも示すことを明らかにした。

第3回対話はさらに時代を下げて「17世紀東アジアの国際関係」と設定した。2018年8月、ソウルに

日本・中国・韓国から9名の国史研究者が集まり、日本の豊臣秀吉と満洲のホンタイジによる各2度の朝鮮侵攻と、その背景にある銀貿易を主軸とする緊密な経済関係、戦乱の後の安定について検討した。また、3回の国史対話を振り返って次につなげるため、早稲田大学主催による「和解に向けた歴史家共同研究ネットワークの検証」のパネルディスカッションが開催された。

第4回対話は『『東アジア』の誕生－19世紀における国際秩序の転換－』というテーマで、2020年1月にフィリピンのマニラ市近郊に日本・中国・韓国から国史研究者が集まり、各国の「西洋への認識」「伝統への挑戦と創造」「国境を越えた人の移動」について論文発表と活発な討論が行われた。

第5回対話は「19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」というテーマで、コロナ禍中の2021年1月に完全オンライン形式で開催され、19世紀に感染症の問題を各国がどのように認識し、いかに対応策を用意したかを見て、さらに各国の相互協力とその限界について考えた。各国からの論文発表に加え、過去4回の参加者がパネリストとして多数参加し、活発な討論が行われた。新型コロナウイルス感染症流行により、やむを得ずオンライン開催となったものの、結果としてはZoomウェビナーというプラットフォームを得ることとなり、新たな展開につながる有意義な対話となった。

第6回対話は、アジア近現代の「人の移動と境界・権力・民族」をテーマとして、第5回に引き続きオンライン（3言語同時通訳）で行われた。塩出浩之先生（京都大学教授）は問題提起で、近現代における人の移動を左右してきた国境に焦点を当て、人の移動が国家主権体制や国際政治構造（帝国主義や冷戦）と密接にかかわる点を指摘した。その後のセッションでも議論が白熱した。やや実験的に自由討論を主体に一日を費やした構成であったが、活発な議論を進めることができたと高く評価された。

本プロジェクトは、フォーラム、セッションでの対話だけでなく、3言語に対応したレポートの配布とリレーエッセイのメールマガジン等により、円卓会議参加者のネットワーク化を図ることを目的としてスタートした。5年にわたる蓄積から、日本・中国・韓国の各国の国史研究者270人を超すネットワークとして成長している。

■国史たちの対話レポートのバックナンバー

第1回国史対話レポート「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2017/8730/>

第2回国史対話レポート「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2017/10611/>

第3回国史対話レポート「17世紀東アジアの国際関係—戦乱から安定へ—」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2018/14261/>

第4回国史対話レポート「『東アジア』の誕生－19世紀における国際秩序の転換－」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2020/15991/>

第5回国史対話レポート「19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2021/17058/>

第6回国史対話レポート「人の移動と境界・権力・民族」

<https://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2022/17575/>

■メールマガジンのバックナンバー

<https://kokushinewsletter.tumblr.com/>